



報道記事というものは――

ふつう、ある事実をつかむうえで、「五W一H」とよばれる原則があります。そのどれをすてても、事実を事実としてつかめないし、伝えることもできないという基本の骨組みです。

WHEN (いつ) WHERE (どこで) WHO (だれが) WHAT (何を) WHY (なぜ) HOW (どのように)。つま

「五W一H」の原則とその限界

① その

報道記事の

取材法

り、「いつ、どこで、だれが、何を、なぜ、どのようにしたか」というものです。

しかし、集会やデモ、会議のニュースなど五W一Hでやると、どうしても、通りいっぺんの記事になってしまふ、なかなかならないのか、という課題をいつもかかえています。

とくに運動が停滞してくると、この悩みは深刻です。

メーデーなどで、参加者にインタビューしても、「うちの職場では何もやってないよ」「マンネリだよ。動員で来たんだ」「執行部に聞いてくれ」などの答がほとんどだったります。

機関紙編集者は、こうした運動全体をどうしていくのか、という視点に立ちながら、だからこそ、どういう取材が必要なのかを真剣に考える必要があると思います。

「どのように」を追求するなかで「なぜ」を

その点で、まず重視したいのは、「五W一H」のうち、「どのように」を徹底的に追求するなかで「なぜ」を明らかにし、そのことによって、「どうなるか」「どうすべきか」を読者に提起できるようにしていくことです。

以前、全学連の機関紙「祖国と学問のために」を編集していたとき、日本女子大学で四十八時間団交をやり、学費値上げを白紙撤回させる、という闘争があり

ました。この話をきいて、私は、感動し、女子学生をそんな激しい闘争にかりたてたものが何だったのかを知りたいと思ひ、すつとんでいきました。

団交は「どのように」やられたか、その後、学園は、「どのように」なっていたか、が取材の中心でした。

団交で学生は、大学と教育のあり方を真剣に問題にし、經理の公開もせずに、「赤字だから仕方ない」と言う理事の姿勢を追及した。「勉強するとは、なんとかして正しいことに近づこうとする」とだと思ふ。「仕方ない」と決めこんで、正しくない方向に逃げようとする立場は大学としておかしい」と。ところが理事側は「世の親なら四十万くらい払う」「三十一万も四十万も五十歩百歩」と言い放ったうえ、五時間後、理事長が無断で帰宅してしまつた。だから、自治会執行部の提案した団交打ち切りの提案は否決され、徹底的な議論がすんだ。団交後の学園では「これまで、先生たちとも学生とおしても、本当のふれあいがあったが、団交を通して、本当に親しみやすい大学になった。何かできそうな気がしてきた」という声が聞かれた。

こうして、私の当面の「なぜ」は一応解明できたのですが、「四十八時間も非常識だ」「一部の人間にあおられた行動だ」という指摘が指導部の一部にあり、この人たちと議論しながら、いっそう取材を深めたので、「四十八時間団交貫徹、学園によりみがえる生気」という大見出し

否定的な意見にくらいつく

第二に、否定的な意見でも、くらいいついていくことです。

「いやあ、うちはたいしたことやってませんから」などという人が、いっしょに食事をしにいったりすると、とてもいい話をしてくれることは、よくあることです。

それと同じように、「へーえ」と思う話をきいたときは、別の立場の人に確認をとると、意外な展開をみることもあります。

全日自労が失業者集会を開いたとき、ある失業者は「職安からは一軒も紹介してもらえなかった」と答えたのですが、執行部に聞くと、「いや、あの人は職安が紹介しても仕事に行かないんだ」と、逆のことを言います。それで、いろいろ聞いてみると、失業者がどうやって生活しているのか、なぜ職安紹介の仕事に行かないのかなど、さまざまな事情がわかってきました。

このように、否定的な話にもあきらめず、意外な事実には冷静に考えて、確認の作業をおこなうなかで、より深く鋭く現実をえぐることができるのです。

「どうせ簡単な報道記事だ」と、おざなりに構えないことです。

学園によりみがえる生気」という大見出し

(全日自労宣伝・機関紙部 松沢常夫)



ルポというものは……

③

ルポ記事の 取材法

ないでしようが。

ニュース記事とルポ 記事のちがいは―実例

ここに、同じ行動を描いた二つの記事があります。ともに、全日自労働機関紙『じかたび』にのったものです。前者は本部の教宣部員が書いたもので、一般的なニュース記事、後者は行動に参加した仲間が書いたもので、ルポ風になっています。

〈例1〉四月二十四、二十五日の二日間、東京で婦人活動者会議をひらき、一日目は会議、二日目は国会議員の賛同要請行動にとりくみました。賛同議員の名前がふえるたびに、選挙当選の知らせを思わせるほどの大きな拍手がおこり、活気にあふれていました。この行動で四十二人の議員さんから賛同をいただき、衆議院三百七十七人、参議院百二十五人の合計四百四十二人になりました。……

〈例2〉「モシモシ、アッ、おくさんでいらつしやいますか。ただいま先生からご署名をいただきました。おくさんのおかげでございます。ほんとうにありがとうございます。ハイハイ、そのとおりでございます。市民のための失対にするように、私たちもいっしょうけんめいつくします。高知へ帰りましたら、かならずお礼にまいります。うれしくてお電話いたしました」。律子（県支部武田書記長）の大きなお腹

が、ブルンブルンと動きます。そばで春野町の梯子さんが、山のような十円玉をもって立っているのです。

「これ、早くしないと、あとがつかえる」と、他県のなかがせかします。「イヤ、電話器がたらんのじゃ」などなど……。

四月二十五日、参議院議員会館第一会議室は、全国からあつまつた婦人代表の異状な熱気と興奮で、うずまいています。壇上の黒板には、つぎつぎと成果が発表されます。「すごいな、よかったな」と口ぐちに言いあい……

前者が「活気にあふれて」という、紋切り型の言葉ですましてしまっていることが、後者では、じつに躍動感をもって目に見えるように伝わってきます。さらに、電話の話のなかみをとおして、国会での行動だけでなく、地元でどんな運動をしているのかが大事であることを、しっかりと訴えているのです。

このちがいは、身体ごとぶつかるなかで、仲間の努力に心から感動できたのかどうかだと思えます。どんなことをしても賛同をとろうという熱意にもえて地元でも東京でも行動（取材）し、心をかわせあつてきたからこそ、「お腹のブルンブルン」にも、またとない喜びを見いだせたのだと思うのです。

まるごとの人間全体で

ルポライターの鎌田憲さんは、組合つぶしの偽装閉鎖にあつてから、資本主義

のしくみを少しでも知りたいと思って、新日鉄の下請労働者となり『死に絶えた風景』を書き、トヨタの臨時工として働きながら『自動車絶望工場』を書くというやりかたをしています。

つまり、ルポとは「できあわせではなくて、自分というまるごとの人間全体で新しく創り出すという仕事のひとつ」であり、「借りものでもない、自分の目と手で現実を把握することから始まる」（全通中野・橋英実氏『本誌七七年九月号』）もので、その「手段などは、可能なすべてを――それこそ、手段を選ばぬこと」（本多勝一氏『ルポライター入門』）だと思ふのです。

本質をふまえる

最後に、いいルポのためには、本質をふまえる、ということを確認したいと思ふいます。私たちは、どうしても部分的なことしか取材できないわけですが、たえずその事実が全体的な事実とどうかかわって生まれているのか、という視点から見なおさなければなりません。それを裏づけるために、典型をさがし、いろいろな資料をあたり、疑問にぶつかるたびに何回も足をこぶ……という作業も必要になってきます。

こうした取材をしながら、運動を半歩先に進めるために何が必要なのかを自分なりに見きわめ、提起していく覚悟が求められていると思ふいます。

（全日自労働・機関紙部 松沢常夫）